

あぶらむ通信

第43号 2021年12月 あぶらむの会発行
〒509-4121 岐阜県高山市国府町字津江3225-1
TEL・FAX 0577-72-4219
E-mail : abram@hidatakayama.ne.jp



あぶらむの新米でおにぎり
絵：北沢佳子ちゃん（小学1年生）

飛驒便り

2021年、今年もコロナコロナの一年でした。人生の中でわずかな期間でこれまでの日常性が一変してしまうことを経験するなんて、今もどこか夢を見ているかのような気持ちの私

です。皆様にはお変わりなくお元気でお過ごしのことと思います。

人と人が訪ね合い語り合うことを水か空気のように思っていたのが、突然の寸断。

人が訪れてきてなんぼのあぶらむの宿も陸に上がったカップの様。台所を預かる女房殿は少しはからだ休めになったものの、もう一面の経理担当者としては頭痛の日々。私の方といえば、人の流れは止まったものの季節の作業は待たなし。これまでウーファーなどの海外ボランティアによって助けられてきた季節作業も一人でシコシコ。「後期高齢者に分類されてもこれだけからだ動くのだからありがたく感謝しなければ」と自分を慰め誤魔化してどうにかこの一年を乗り越えてきた。しかし田植えや稲刈りなど手数なくしてはできない作業、今年も「アラ還暦」となった卒業生たちに助けられました。ただただ感謝の一言です。

○3年ぶりの家裁少年

こうして人の訪れが絶えて久しいあぶらむに少年がやってきた。3年ぶりの家庭裁判所補導委託による通称「家裁少年」である。

あぶらむでは2004年から受け入れ開始。今年で18年目となる。この間にここで生活を共にした少年は22名、少年たちの抱える問題や事件を考えると日本という国は豊かになったのだろうか、「豊かさ」とは何なのだろうかと深く考えさせられてしまう。

最初に来たのは、S少年16歳。18年前といえば現在^{いま}はもう34歳バリバリの働き盛り。どうしているだろうかと折りにつけ思い出す。家裁少年たちにとってここは自分で来たくて来た場所ではない。何らかの理由^{わけ}あって道を外れ、立ち止まって自分と向き合うことを強いられた場所。少年によっては思い出したくない場所であっても仕方ない。

○家族連れで泊まりに来た元家裁少年

先日、この家庭裁判所の補導委託制度を紹介していただき、あぶらむにそのきっかけをもってこられた元家裁調査官の辻村さんが訪ねて来られた。退職後の10年、まだ家裁の仕事と関わりがあったため特定の補導委託先を支援することは職務上できなかったのでしょうか、「これでやっと自由になりました」とあぶらむの会員となるためわざわざ訪ねてくださった。私たちにとっては大きな大きなエールとなった。

そして入れ替わりに10年前に帰って行った少年が家族を連れて泊まりに来た。一歳半の一人娘を甲斐甲斐しく面倒みている姿を見て胸が熱くなった。

自分の子どもへの虐待が増えた今日、体罰の是非、いや何があっても体罰はダメという時代になった。私は四人の子育ての中で手だけは出さなかったと自負している。しかしある時、子どもから必ずしもそうではなかったと言われ無然!! 愕然!!

マル・トリートメント（不適切な関わり、言動）は多少あったと思うが体罰だけはしないと決めていた。何故なら自分は明治生まれの親から散々やられてきたから、またそれだけのヤンチャ者だった。でもその時子ども心にも、いつの日か自分が親になったらこんなことはしないと心に決めた。なのに家裁少年に対して思わずピンタを張った子が3～4名ほどいた。

他人様の子に手をあげた自分のこの手が痛かった。

ギリシャ語で「教育」という言葉を「パイディア」という。「パイス＝ムチ打つ、叩く」という暴力的と思われる言葉を母語としている。古きイギリスの教師が黒板の前で鞭を持って立っている姿が目につかぶ、童謡「すずめの学校」の光景である。私はこの言葉の語源に触れた時、このパイディアとしての教育をどのように理解すればよいのか考え迷った。

福島県会津若松の教訓に「ならぬことはならぬものです」という言葉がある。人としてやってはいけないことはやってはいけない、その道から外れそうな時はからだを張ってでもその子の前に立ちはだかる！私はこの「パイス」という言葉を「立ちはだかり」という言葉で理解表現するようになった。「そんなことしたって、恨まれるか殺されるかするのが関の山」という人もいたが、ならぬことはならぬものなのです。

あぶらむでの半年余りの生活を終えて家庭に帰っていった少年たち、その後電話や手紙、メール、訪ねてきた者を数えると55%という数字になった。この数字は多いのか少ないのかは知らないが、かつて家庭裁判所から今の自分の在り様と正面から向き合い、これからの生き方を整えなさいと強制されてきたこの場所へ家族を連れて泊まりに来た元家裁少年を得て、その一事だけでこのあぶらむの宿をやってきたことを嬉しく思った。

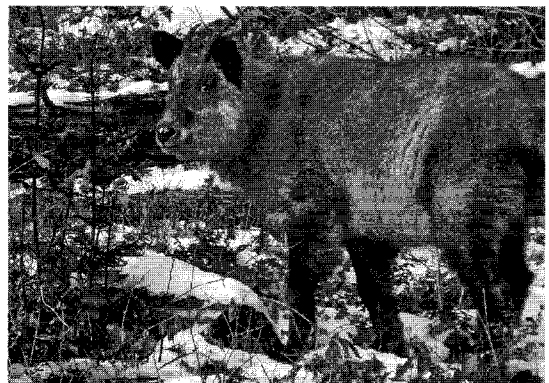
〇もう一つ嬉しい話

里山自然学校に初参加したカコちゃんのおばあさんからの電話。「カコが自然学校で嬉しかったこととして、一人でお風呂に入った後、その後に入った沖縄から参加したひはるちゃんが“カコちゃん、お風呂きれいに入ってくれてありがとう”と言ってくれた。カコはそれが嬉しかったと言っていました。いい話ですね」と。

私はこの話を聞いて本当に嬉しかった。カコちゃんは小学1年生、ひはるちゃんは小学3年生の会話。「あなたの後にお風呂に入ったけれどとっても気持ちよく入れたヨ、ありがとう」こんな言葉を紡ぐ小学3年生、それを「とっても嬉しかった」と受け止める小学1年生。今、こうして思い返すだけで心がジーンとします。多くの人に聞かせたい話です。

それでは皆様、どうぞよいクリスマスを、そしてよいお年をお迎えください。

2021年12月 あぶらむの会 代表 大 郷 博



今年も冬野菜の白菜や大根、2m余りの柵で囲ったにもかかわらず全て食べられてしまった。数日後に現れたカモシカに、「このハクサイ肥りめ!!」と女房殿の怒りの奇声。一方的に犯人に決め付けられたかわいそうなカモシカさん。それにしても真四角に隅々までよく肥っていた。

2021年夏、コロナ禍真っ最中のあぶらむ里山自然学校開催記

里山自然学校の開催をめぐり、今年も悩みました。しかしこの閉塞感が子ども達の心に与える影響を思った時、「こんな時だからこそやろう！」と開催を決めました。のびのびとした子ども達の笑顔を見て、こんな時だからこそやって良かったと思いました。

小学1年生 佳子ちゃん

も お た た ま に し や も る よ ん お も す か あ お
 げ ち の こ な ぜ め う と と ち た な ぶ ち
 ん ん し と た っ ン て き と お こ に ん め い つ ら ん
 キ ぶ か で こ た 介 ら も も ち お ぶ し や り む ぶ
 で さ っ す と こ こ り た っ た も さ の だ が お さ
 ら ん た ② と っ ③ の て よ え ん ち っ た り ん
 も よ し み は て こ と て の の た の ん へ
 き ぜ み ① て こ わ き は い こ し び
 たい ま ん ず ー き こ わ か こ な け と か っ
 ぐく た が も 人 る い か た て ち が す た の
 かん ね こ さ て よ う っ た た ほ っ き で

あぶらむしぜん学校のおもいで。

小学1年生 泉太くん

ほくは、八月におにいちゃんといっしょにしぜん学校に行きました。おもしろかったことの一つ目はすごろく川で川あそびをしたことです。

ほくは水がきれいだから、さいしょはないていました。だけど、みんながじゅんばんにさそってくれて、水に入ることをきめました。はじめはこわかった川あそびだったけど、みんなでマットにのったり、ひとりであそびにのったりすることができて、たのしかったです。

二つ目はあぶらむオリンピックです。リレーでは、いつもは走らない大人も子どもといっしょになって、ひいひいいいながらがんばっていたすがたがとてもおもしろかったです。たかやなぎのおじさんは、みためがおじさんなのに、走るのがとってもはやくてびっくりしました。大人も子どももみんな力をあわせてがんばったのがたのしかったです。

ことしのあぶらむ自然学校ははじめてのさんかだったので、さいしょの日のよるに、さみしくて泣いてしまいましたが、らいねんはなかないようにしたいです。川あそびもすきになったので、つぎはもっとたのしみたいです。

子どもより大人の方が…！

金城 香

2019年夏。次女、陽音と三女、陽咲があぶらむ里山自然学校に参加。当時小学1年だった四女、陽晴は親がいない不安がぬぐえず不参加。でも姉たちが帰ってくると、川での飛び込みの話、ピザがおいしかった話など絶え間なく楽しかった話を聞かされ、次は絶対に参加したいと言っていたのに、翌年は新型コロナウイルスの感染拡大により、泣く泣く断念。

今年の夏、陽晴にとっては、念願の「あぶらむ里山自然学校」参加となりました。ところが、日程が近づくにつれ、新型コロナウイルスの感染者数が爆発的に増加。緊急事態宣言が発令されている沖縄から行っていいものか、かなりの迷いと不安がありました。しかし、子どもたちの「2年」は、大人の「2年」と比べものにならないほど、その年齢で得られるさまざまな機会を逃してしまう。子どもたちの成長のため、いろいろな経験をさせたいのなら、今行こう！！と、PCR検査を受け、消毒液を持ち、用心に用心を重ねた感染対策をしながら、あぶらむの里へ向かいました。

あぶらむに着いたとき、山の青々とした木々の美しさに魅了され、あぶらむの宿のいつもと変わらない佇まいに実家に帰ってきたような安心感に包まれました。

さて、今年の里山自然学校は、従来より1日短い、4泊5日の日程でしたが、双六川での川遊び、ピザ作り、大壁画作り、記念品作り、肝試し、あぶらむオリンピックと盛りだくさんのプログラムでした。

特に、双六川での川遊びは、子どもたちが一番楽しみにしていたプログラムで、3人とも絶対に一番高いところから飛ぶ！！と大張り切り。実際川で飛び込みをする岩を見てみると、3段階の高さがあり、私もどうにか真ん中の高さまで飛んでみたのですが、本当に「清水の舞台」から飛び降りたんじゃないかと思うほどの、恐怖心が…。1回飛んだだけで、もう二度と飛ぶまいと誓ったのでした。それに引きかえ、我が家の三人娘は崖をよじ登らないといけない一番高い岩から、全く何の躊躇もなく、何十回も飽きることなく飛び込み。沖縄にはこんなに深くて、こんなに高いところから飛び込める川はないので、本当に楽しかったようです。

また、あぶらむオリンピックでは、薪を積んだ一輪車のリレー、お椀に水いっぱい入れてこぼさないように運ぶリレー、二人三脚（ソーシャルディスタンスなんてお構いなし！）、ボール入れ、子どもも大人もごちゃまぜの真剣勝負のリレー、じゃがいも掘り、マス釣りと、さすがあぶらむ！さすが大郷先生！種目が独特すぎます。オリンピックは子どもたちのイベントとばかり思っていたのに、まさか、あんなに走らされるとは！！勝負事になると、大人も子どもも関係なく真剣勝負になり、運動神経のない私は、子どもたちの視線と翌日の筋肉痛が恐怖でした！！でも山に広がる子どもたちの大きな笑い声に、世の中新型コロナウイルスの脅威に脅かされていることも忘れ、大いに盛り上がりました。同時期に東京でオリンピックが開催されていましたが、盛り上がりは本家にも負けていなかったと思います。

自然学校では、石釜で焼いたピザのおいしさ、針葉樹の木々の美しさ、本当に沖縄では経験できないことばかり。ピザは今まで生きてきて本当に一番おいしいピザでした！！たくさん貴重な経験をありがとうございました。大切な夏の思い出になりました。

ちなみに、今回の里山自然学校の参加。本当は、子どもたちの成長のため、本人たちだけで参加させたかったのですが、移動途中の感染対策を徹底するため、私も一緒に参加させてもらいました。できる限り私がいないつもりで…と思っていたのに、振り返ってみると自然学校を一番楽しんでいたのは、私かも。すでに来年も参加したくて、あぶらむへ行きたくて、うずうずしています。

来年は、陽音が中学3年になり受験生。にもかかわらず、本人は来年も参加する気満々です。来年は子どもたちだけで、飛行機に乗り、電車に乗り、バスに乗り、高山まで行かせてみたいなあ。

「何があっても、戦争はならんどう！」曾祖母から伝えられる沖縄戦

あぶらむ好きの沖縄の金城家は四姉妹。陽詩、陽音、陽咲、陽晴と、年に一度しか会わないとどの子がどの名前だったかわからなくなってしまうシニア泣かせのかわいくも素敵な姉妹です。

そんな四姉妹のお母さんからの手紙の中に、この夏参加出来なかった長女の陽詩ちゃんの「第30回 児童・生徒の平和メッセージ」で最優秀賞を得た作文が入っていた。胸がいっぱいになった。皆さんにも読んでもらいたく思います。

第30回「児童・生徒の平和メッセージ」作文部門 中学校の部 最優秀賞

ばあちゃんのほめ言葉

沖縄県立開邦中学校三年 金城 陽詩

「ひなちゃんはすごいねえ。ばあちゃんがおんなじ年の時は、そんなことできんかったさあ」
私には、今年九十歳になる曾祖母がいる。曾祖母は年齢の割りに元気な人で、私は曾祖母の家に行って、色々な話をするのが大好きだった。学校の話や勉強の話、部活動の話。そんな他愛のない話をする度に、曾祖母はいつも私をこんな風にほめてくれる。私はそのほめ言葉を、今までにたくさんもらってきたほめ言葉のうちの一つ、というように軽く受け取っていた。

しかし、数年前のお盆の日、私のその言葉の捉え方は変わった。私がいつものように曾祖母と話をしていると、テレビからは憲法九条改正についてのニュースが流れてきた。曾祖母は、今まで話していた時の笑顔とは全く違う、とても真剣な表情で、そのニュースを見始めた。そして、

「ならんどう。戦争は絶対にならん」
と独り言のようにつぶやいた。聞こえるか聞こえないかほどの小さな声。それでも、その声は力強かった。沖縄戦という地獄を生き抜いてきた曾祖母の心からの訴えだった。私は思わず、
「ばあちゃん、戦争の時どうだったの」

とたずねた。今まで私も曾祖母もあまり触れてこなかった話題。曾祖母は、このとき初めて自分の戦争体験を詳しく話してくれた。その話を聞いて、私はやっと曾祖母がいつも言っていた言葉の「本当の意味」を知ることができた。

一九四五年四月。沖縄の綺麗な青い海と空は、突如として米軍の軍艦と爆弾で真っ黒に染まった。沖縄戦の幕開けだ。曾祖母は当時まだ十四歳であった。しかし、毎日防空壕を掘ったり食料を確保したりして、ひたすらに米軍からの攻撃に備える日々。今のように楽しく学校へ行って、勉強や部活をしている場合ではなかった。自分の住む町が一瞬で火の海になった。逃げ隠れた先の馬小屋に空から爆弾が降ってきた。その爆弾で一緒にいた叔父が死んでしまった。さらに南へ逃げる途中で、数メートル先にいた祖母が銃に撃たれて死んでしまった。気づけば周りに家族は誰もいなかった。そんな私たちには想像もできないような状況も、曾祖母は全てその目で目の当たりにしてきた。いつしか、もう少しで自分も死ぬのだと、死さえも恐れなくなっていた。私と同じ十四歳という年齢で。私たちがたくさんの文字が並んだ黒板を、友達のはじけるような笑顔を、この瞳に映しているような瞬間が、曾祖母にはなかった、私たちが今過ごしている「青春」という時間は、第二次世界大戦に、そして沖縄戦にうばわれた。

「ひなちゃん、どんなことがあっても戦争は絶対にならんどお。ばあちゃんたちみたいにどんなに勉強したくてもできなくなるからねえ」

曾祖母はいつになく真剣な眼差しで私に言った。私の目からは幾粒もの涙が流れていた。曾祖母のこんなにも悲惨な体験を詳しく聞こうとしてこなかった申し訳なさや、自分がおかれているこの環境の有り難さも分からずに過ごしていた申し訳なさなど、色々な感情があふれて止まらなかった。

まだ小学生の頃の私は、分数がわからないから教えてほしいという曾祖母に向かって、

「ばあちゃん、そんなのもわからんわけえ!？」

などと言っていた。そんな普通なら怒られてもおかしくないようなことを平気で言う私に対して、曾祖母は、

「ばあちゃんは勉強があんまり得意じゃなかったからねえ。もう難しいことは忘れちゃたさあ」と笑顔で返していた。しかし、曾祖母は「勉強しなかった」のではなく、「勉強できなかった」のだ。曾祖母は、学生時代に学べなかったことを、八十代になってから自らで少しずつ学ぼうとしていたのだ。その事実を知った時にはもう何年も経っていて、ひどいことを言ってしまったことを直接謝れていない。でも、私は今だからこそ声を大にして言いたい。私は、こんな曾祖母のひ孫として生まれてこれたことをすごく誇りに思う。

どんなにしたくてもできなかった「青春」。もう一度見たくても見ることのできなかった綺麗な青い海や空。そんな人たちが、七十五年前、この沖縄にたくさんいたことを忘れないでほしい。私たちと同じ年頃で生と死の間を生きなければならなかった人たちがたくさんいたことを忘れないでほしい。今あるこの生活がとても幸せであるということを絶対に忘れないでほしい。そして、もう二度と誰の瞳にも戦争という地獄が映らぬように。「青春」という人生においてかけがえのない時間がうばわれぬように。私は、七十五年前沖縄戦という地獄を生き抜き、命を分け与えてくれた曾祖母の心からの訴えを世界中の人たちに伝え続けたい。

「どんなことがあっても、戦争は絶対にならんどお」

あぶらむの田植え・稲刈り 体験記

下田 英一

あぶらむを訪れた多くの方が、あぶらむのご飯は美味しいと、感じていらっしゃると思います。おかずは一つ一つ手間をかけられていて、深みのある味わいで、お酒も進んでしまい、食から癒されるということがあるのを感じます。

ご飯は、おかずで一杯、おかず無しでもう一杯と食べたくなくなってしまいます。この美味しいご飯が目前に出てくるまでにどのような手間が掛けられているのでしょうか。

2018年9月に、大郷先生が帯状疱疹で動けない、今年の稲刈りができない、という大変な事態であることをお聞きし、稲刈りなんて（農作業全般ですが）全くの未経験で、できることがあるのかわかりませんでした。稲刈りのお手伝いに参加させて頂きました。それ以降毎年、そして、今年の5月には、田植えも体験させて頂きました。

あぶらむの田んぼは、四角い1.5反（15a）くらいのもので、三角の9畝（9a）くらいのもので合わせて2枚あります。GWから3週間後の土日に田植えを行いました。

良いお米を収穫するためには、田植えまでにやる事がたくさんあります。種籾を良い状態にして、発芽させ、苗を作ります。そして、育苗専門の農家の田で成長させます。また、植える田んぼの準備も色々あります。田を耕し、肥料を加え、土に力をつけます。水を張り、その土をできるだけ平面にして、稲の成長にむらがないようにします。色々な人が関わるので、田のどこかに肥料が偏ってしまうこともあるそうです。

いよいよ田植えです。苗は15cmくらいに育っています。苗を田植え機に据え付け、田植え機に乗車して、田をまっすぐ進むよう操作します。まっすぐといっても、地面は土ですから、固さも異なり、多少の凹凸があり、田植え機は絶えず上下に揺れたり、傾いたりします。そのたびに田植え機は左右に揺らぎ、植えられた苗はくねくねとした列となってしまいます。後ろにはっきりと運転の良し悪しが表れてしまいます。それは、もう植えなおすことができないので、取り返しがつきません。進む先に目印となる棒を他の人に持ってもらい、そこを一直線に目指します。田植え機には、直進するための目印も付いているのですが、それよりも、遠くの目標を目指す方がまっすぐ進めるようでした。やはり目の前の細々としたことに捉われるのではなく、遠くの大きな目標を目指す方が、まっすぐに進めるようです。

まもなく田んぼのはしというところで、田の横に目印をもった人がいて、その人の合図で、植え付け機を持ち上げて、田植え機をUターンさせます。それを繰り返し、最後に機械を回すためのスペースにも植えて、田の全面に苗を植えます。機械の操作がまずく、隣の列との間が狭くなってしまうと、その時は見た目の問題に過ぎないかもしれませんが、刈り取りの時に苦勞することになります。少し残った苗は手で植えました。

9月のお彼岸のころに収穫です。5月には水から5～10cmほどしか出ていなかった緑色の苗が、9月には、黄金色の稲が頭を垂れて、田をぎっしりと埋めつくしていたのを見た時には、とても嬉しかったです。この間、私は東京で過ごしていましたが、田では、雑草取り（とても大変）や稲の状態に合わせた水の管理をして、順調に育つように手入れしていきます。それでも気温や太陽や強風の影響を受けてしまい、思ったように育たないこともあると思います。

稲刈りは、通常コンバインという大きな機械に一人が乗車して、稲を刈り取り、そのまま脱穀し、藁を排出するというものを使います。収穫した籾（もみ）は乾燥させなくてはならないので、その後は機械乾燥となります。

でも、あぶらむの稲刈りは違います。バインダーという手押しの稲刈り機で、1条（1列）ずつ刈取っていきます。バインダーは決まった量の稲を束ねて、横に押し出してくれます。1条ずつですので、田んぼの中を行ったり来たり、長い距離を歩きながら、刈取っていきます。一見簡単そうですが、土の凹凸や稲の列のゆがみがあり、思ったように進めません。操作を誤ると刈取らずに、稲をなぎ倒してしまうので、緊張を強いられます。

初めて稲刈りをさせて頂いた時には、田んぼの水分が多いため、足が抜けなくなるほどでした。自分が置いて行かれ、刈取り機だけ進み、稲をダメにしてしまいかねませんでしたので、その年は大郷先生からの叱咤激励の怒声（本当に危ないので）の中での作業となりました。また、特に水はけの悪いところは、稲刈り機が泥に埋まって動かなくなってしまう可能性があるのも、人の手によって鎌で刈取り（手刈りし）、それをひもで束ねなくてはなりません。それもとても手間がかかります。

収穫は刈取りで終わりではなく、刈取った稲を乾燥させるために、稲架掛け（はさがけ）をします。田んぼで横木を渡して、そこに稲を逆さまにかけて干します。田園風景として、目にしたことがおありだと思いますが、これは、見るとやるとでは大違いです。太さ8cm程度の木を3本使い、支えの足を2つ作り、そこに長くて太い木をかけていきます。それができたところから、刈取った稲の束をかけていきます。2週間ほど、田んぼで乾燥させますので、風が吹いても倒れないよう、飛ばされないよう、しっかりと作っていきます。作業は一人ひとりのエネルギーを無駄にしないよう、効率よく進めなくてはなりません。一人では決してできない作業で、大勢の連携と丁寧が必要です。今年は17人が関わり、晴れた1日で何とか終わらせることができました。この後は、脱穀がありますが、こちらには携わっておらず、他の方の弁をお聴きしたいところです。

収穫の後の夜は、収穫の喜びと一仕事終えた満足感で、とても楽しい晩餐です。

田植えと稲刈りという数日の体験にすぎませんが、米を育て、収穫するということは、どれほど大変なことかと思いました。現在では省力化も進み、お米は安定的に収穫できているので、そこに至るまでの水の管理、肥料、雑草取り、刈取り、乾燥等々、全てが良きお米をたくさん収穫するために考えられてきた知恵です。長年の農家の知恵と苦労が、今、伝承されてきた農業なのだと実感いたしました。そして、作業は省力化できても、自然の恵みを頂く育成の期間は短縮できません。効率ではなく、天日干しをして、手間をかけた稲だからこそ、美味しいお米になるのだと思います。

本来、農業は、自然の力を頂き、そこに、人と人とのつながりが不可欠で、多くの段取りが1年という長い時間の中で繋がり、また、その知恵が次の世代にも伝えられてきたものではないかと思えます。テレワークやスマホの中の世界とは対極にあり、結果的に、自然と人とを、そして、人と人をつなげる仕事なのではないかと思えます。

1反（10a）で約9俵（540kg）収穫できて、1俵10,000円（下がっています）として90,000円/反です。時間も手間もかけて、初任給の半分以下です。ちなみに、ご飯茶碗1杯は、32円です（総務省調べ）。経済的なことのみでいえば、農業をするより、お金で買った

方が良いと考えてしまうかもしれません。親が子どもに後を継いでいけ、と言えないかもしれません。日本が「食糧は国外から買う」という道を選んだせいなのかもしれません。

コロナ禍の影響で、家庭での手作りの食事が増えました。食は、簡便で、楽しく、美味しく食べられるものが求められています。生産地と消費地の乖離は大きく、食べる人が、食のできる過程を何も知らないからこそ、生産や製造は人任せで、美味しい食を安く手に入れたという要求が当たり前のことになっているように思います。私はこのような体験をすることで、目の前に出てくるご飯を、また、食べ物を食べられることのありがたさを、身体を通して知ることとなりました。私自身、乾物食品に携わる者として、食の生産過程やその良さを伝えながら販売していかななくてはならないと思いました。このような体験をさせて頂いた大郷先生と、共に体験した皆さんと、あぶらむの田に感謝申し上げます。

持ち寄りコンサート（別名 大人の学芸会）

私（大郷）の子どもの頃の活躍の場は隣のクラスとのケンカ、運動会、学芸会だった。しかし、学芸会は先生のエコヒイキが強く、出番があるのは成績優秀な子で、私のような学業成績悪くヤンチャ者の出番はなかった。

そんな思い出、年を取ると懐かしく恋しく、ならば自分で「場」をつくろうと「大人の学芸会」を始めたのが7年ほど前。決まりはただ一つ、「出し物」を披露する前に「ショートスピーチ」をすること。唄う歌などを通してその人が歩んできた道程や出会った光景などが見えてくるから、これがたまらない。開催は10月中旬、あなたもどうぞご参加ください。お待ちしております。

「大人の学芸会」報告

ピアニスト・作曲家 戸口 純

10月23日（土）の夜、あぶらむの宿の諸魂庵で「大人の学芸会」が開かれた。元々はコロナのため、地元の方たちだけの会になるはずであったが、電話での日程調整の際に私たちも呼ばれて参加することになった。こちらは1985年に立教大と桃山大が参加したフィリピンキャンプのメンバーの内、笹岡、清水智覚、和智、戸口の4人である。私個人は発表は得意だが、音楽の専門家なので「学芸会」で発表すべきか悩んだが、ふたを開けてみれば参加者は多芸多才、熱意ある準備が反映して内容が濃く素晴らしい会となった。具体的に発表のすべてを列記することができず残念である。集まった方々の多くは、大郷先生のバイク仲間ということで、その内の高橋さんは修理の専門家で、あぶらむの稲刈り機が故障してピンチだった時は、臨時に立ち寄りプロの手技で直したという人である。彼は情熱を感じさせるプ

口はだしのシンガーで、会の最後を締めてくれた。ミュージシャンのかき鳴らすギターは当夜、音響の良さを誇るといふ諸魂庵に響き渡って快適だった。

発表で一番多かったのはギター伴奏付きの歌であったが、合気道、太極拳やサクソ、トランペットも演じられ、歌でも三味線伴奏の小唄や自作自演のメッセージソングと多様であった。もう少し内容を記すと、先頭バッターは住み込みのマサヒロ君。私は昔も何人も住み込みの生活実習プログラムの少年（少女はいただけるか？）に会った。大郷先生と育さんならではのこのプログラム、ずっと続けてほしいことのひとつだ。彼は「自分の否定的でとがっていたオーラが、あぶらむでの人との出会いで明るくポジティブになった」と唄う前に話した。ちなみに私たちが五右衛門風呂入る時に、薪を炊いてくれたのも彼である。

それから当夜、もう一つ良かったことは司会の一部を川上美砂さんが引き受けてくれたことで、運び方が良かったし、参加者は美砂さんのコメントに励まされたはずだ。私が最後のほうでベートーベンのピアノ・ソナタ「月光」を弾いた時も、「良かった、漫才よりも良かった」というコメントが発せられた（元来は3人で漫才をやるつもりだったため）。

終演後、私たちは滞在も一晩であったので、夜遅くまで話し込んだ。一つのテーマは、あぶらむの未来であって、これは今後ますます重要な事柄になるだろう。後継者が欲しくとも大郷先生が歩んできた道は稀有であって、彼のようなことを出来る人はいない。しかし、一部のプログラムでも未来につなげていけないかという話が持ち上がった（教育プログラムや発表の企画に貢献したい気持ちは私にもある）。和智さんは泥酔して、彼の意見はベロベロであった。やがてしらふの男女が語りあわねばならない。

以上、楽しい「学芸会」と一夜のレポートをさせていただきました。

あぶらむ みんなで持ち寄りコンサート

オートバイ修理販売業 クラブマン ファクトリー社長 高橋 秀

私が大郷さんと知り合ったのは、12年前の冬だったと思う。セカンドバイク購入の相談に来工されたのが最初である。

その後、メインバイクの購入へと話が変わり、現在所有している大型バイクと一緒に岐阜市まで引き上げに行った日のことをよく覚えている。その時は、あぶらむ？聞いた事も無いし、怪しい秘密結社か何かと思っていた。

その後すぐの春一番の会に納車祝いにと招待いただき、落語の会、WAYNOとイベントがあるごとに誘っていただき、一緒に酒を呑むようになった。

ちょうど一人息子に何か少年らしさを求めていたこともあり、次の年には町内会の子供合宿に協力していただき、その次の年には夏の自然学校に参加、2018年のネパールの旅にも親子で連れて行っていただいた。その間も仕事や子育て、家庭の愚痴などを聞いてもらうべく、気が付くとよくあぶらむに出入りするようになった。その都度、ご馳走になり酒を呑み、五右衛門風呂もいただいたりした。そう、秘密結社等と疑うどころか、すっかり入り浸っているのである。

何かお返しをと考えてはいるものの、機械の修理以外、米の炊き方も知らない私である。

少し申し訳なさを感じ始めた頃に、大郷先生が大人の学芸会（持ち寄りコンサート）をやってみたいと言い出した。前述した通り、米も炊けない私だが、実はギターは少しだけ弾けるのである。早速参加を申し出ると、さあ、どうかあぶらむの人達の心に私の歌声が響きますようにと腕が鳴るのである。

このコンサートは今年で6年目を迎えた。いろいろな人がいろいろな技を披露してきた。大郷さんのトランペットしかり、賛美歌、琴やマジック、踊り、合気道、太極拳、ハーモニカ、三味線、サクソにモンゴルのホーミー等もあった。勿論ギターをやる人もいる。今年のピアノに関してはプロのピアニストの演奏だった。プロの演奏の後、最後に残った私は重圧を跳ねのけるべく、日々のお礼にと心を込めて歌ったのである。

趣味でやっている事でも、それを披露できる場があるというのは面白いと感じた。プロの方も楽しそうに、そして素晴らしい演奏だった。このコンサートを目標にして、あぶらむの少年も初めてのギターを練習したそうだ。

それぞれが楽しみながら、人を楽しませようとする様はまるで祭りのよう。コロナ禍により、人と人とのつながりが希薄になっている今、とても有意義な時間を過ごさせていただいた。

あら、いけない。お礼のつもりの魂の叫びは、またすっかりお世話になってしまっていた。今回の分は、そうだな、また来年にお返ししようと、何を歌うか今から考えているのである。

あぶらむの会創立30周年記念出版

「CAMINO de ABRAM あぶらむへの道 ―その旅の途上で出会った人々―」

コロナ禍のこの一年、おかげさまで2,000冊近くをリリースすることができました。多くの方々からの温かな読後感想に新たな力が与えられました。感謝です。

本書は自主出版のため、一般書店での販売はなされておられません。購入ご希望の方は直接あぶらむの会へお申し込みください。

ご注文は、郵便振替（代金先払い）にてお願いいたします。

【振込先】 口座番号 00800-4-88065

加入者名 一般社団法人 あぶらむの会

■通信欄へご希望冊数をご記入ください。

郵送の場合、お振込金額は「2,000円×ご希望冊数」となります。

ご入金確認後、振込用紙にご記入いただいたご住所へ発送させていただきます。

尚、お問い合わせ及びご不明な点はメール・TEL・FAXにて当会へ直接ご連絡ください。

メールアドレス abram@hidatakayama.ne.jp

TEL・FAX 0577-72-4219

一般社団法人 あぶらむの会

代表 大郷 博

『第9期通常総会 開催報告』

第9期通常総会を2021年3月にあぶらむの里で開催いたしました。多くの方にご参加いただき、心よりお礼を申し上げます。

日 時：2021年3月20日（土）16：00～17：30

場 所：あぶらむの里 母屋

出席者：正会員20名（あぶらむの里9名、リモート参加11名）

総会次第：

(1) 開会挨拶

(2) 議長・書記・議事録記名押印人の指名

(3) 定数の確認

(4) 議案

・ 役員を選任（第10期は役員任期2年の2年目です）

再任役員 * 敬称略

理事：大郷博（代表理事）、山田益男、西田邦昭、杉木峯夫、柴原薫、
大郷育、川上美砂、西村正和

監事：川上詩朗

・ 第9期活動報告

・ 第9期決算報告及び監査報告

<貸借対照表>

資産合計 99,401,074円（流動資産52,500,714円 固定資産46,900,360円）

負債合計 62,875円（短期借入金62,875円）

正味財産 99,338,199円（うち当期正味財産減少額1,919,987円）

<収支内訳>

収入合計 10,415,832円（会費収入1,517,005円 寄付収入2,534,996円
研修収入1,593,470円 他）

支出合計 12,335,819円（減価償却費を除いた実質支出9,820,464円）

当期収支△1,919,987円（減価償却費を除いた実質収支595,368円）

・ 第10期活動計画

・ 第10期予算(案)

<収支予算案>

収入合計 7,280,000円（会費収入1,500,000円 寄付収入2,500,000円
研修収入1,000,000円 他）

支出合計 10,280,000円（減価償却費を除いた実質支出7,280,000円）

送迎車購入費用 4,500,000円

当日の資料、議事録は、あぶらむの会ホームページに掲載しています。

<http://www.abram-no-kai.com/>

画面右メニュー "会員専用ページ"（パスワード：UTE48）にログインして、

画面右メニュー "2021年総会報告" をクリックしてください。

『第10期通常総会について』

第10期通常総会をあぶらむの里で開催させていただきます。多くの方のご参加をお待ちしています。

2022年度会費納入いただいた会員各位に対して、1月下旬～2月上旬頃に正式案内状を郵送させていただきます。

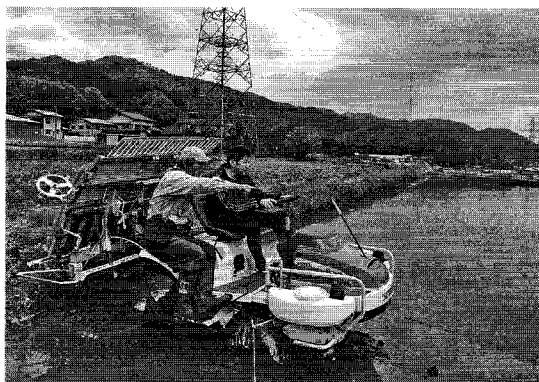
日時：2022年3月19日（土）16：00～（15：30～受付開始）

場所：あぶらむの里

議案：第1号議案 第10期活動報告、決算報告、監査報告

第2号議案 第11期活動計画、予算案

2021 コロナ年 あんなこと（写真でみるこの一年）



田植えは一発勝負、曲がったら曲がったままやり直しはきかない。
この作業、中々世代交代できなかった。今年は思い切り下田君へ…、見事な出来栄でした。



五右衛門風呂での悪ふざけは禁止。
なのに、このさわぎ。よく見たら主犯は私の孫でした。



大岩からの滝飛び込み風景

2022年 冬の里山自然学校ご案内

あぶらむの里が一番輝くのは冬！すっぴりと雪に覆われた里はなぜか優しく暖かなのです。そんな中でのソリ滑りや雪だるまづくり。いろんな野生動物の足跡やカモシカ、ウサギなどとの出会い。新しい発見への誘いです。子どもは風の子、冬こそ子どもの出番です。温かいおしるこや豚汁も待っています。

期 間 2022年2月11日（金）～13日（日）2泊3日

参加費 20,000円（税及び全費用込み）

参加ご希望の方はあぶらむの会までご連絡ください。

2022年の行事予定はコロナ禍で流動的なため、
あぶらむのホームページにて決定次第お伝えします。

<http://www.abram-no-kai.com/>

寄付者（'20年12月14日～'21年12月15日）敬称略

青柳真智子／安藝淳二／秋本光一郎／秋山信之／新垣トシ子／新崎春子／新家恵子／安藤道代／池崎純一／池田正毅／石原つや子／市川聖マリヤ教会／一柳典利・百／伊藤浩子／岩崎海大／岩佐英夫／岩沢満／岩田幼稚園／上原栄正・百子／鶴川久・貴子／鶴川雅行／江崎忠男／遠藤淳治／太田純子／大脇一生／岡田賛三／沖縄聖マルコ保育園／小島正則／小野田恵子／梶原恵理子／片山佳子／加藤正／加藤寛／門谷成美／河野正司・マリ子／神原一二三／木俣貞子／木村幸雄／黒木一郎・誠子／合田尚・悦子／香村美成／小柳證／齊藤保／坂本吉弘／笹部昭博／佐藤芳子／座間味法子／澤武子／静谷英夫／清水自動車整備工場／下田英一・由香／鈴木暁／鈴木武次・保子／鈴木知子／鈴木康仁／須田肇／砂川博秋／須間栄津子／高瀬留美／高田建夫／高橋保／高濱友理江／高柳真／田口清吾／竹林徑一／橘政興志／館野裕之／田中誠／棚橋忍／棚原恵正／谷章子／谷口茂雄／俵里英子／丹安紀子／中部学院大学宗教委員会／坪井令夫／寺田信一／東京セントポールライオンズクラブ／遠山章夫・秀子／富山聖マリア教会／豊永泰子／直井雅子／長尾文雄／中島務／中西和子／中村力・英子／中村正明／中村芳枝／ナザレ修女会／布目博久／根本利子／野田修治・洋子／野田直人・さえ子／長谷川秀司／長谷川勉／長谷川牧子／畑井正春／早瀬真知子／速水直子／原川節子／藤田町子／古沢伸雄／北條鎮雄／星野一朗／前田晃伸／松平謙次／松戸聖パウロ教会／三沢悠子／光安啓明／宮崎秀貴／宮本房江／宮本真紀／宗像千代子／森毅／諸岡研史／八木克道／安田昭彦・香恵／山田益男／山本鐘三／横浜聖クリストファー教会／レーマン幸子／無名氏1名

物品寄付者（'20年12月14日～'21年12月15日）敬称略

(株)アリミノ 田尾兵二／クラブマンファクトリー 高橋秀

